顕彰会便り

No.17
平成13年(2001) 3月31日
編集・発行
津田左右吉博士顕彰会
美濃加茂市蜂屋町上蜂屋3299-1
TEL 0574-28-1110

“津田左右吉博士生家の移築保存が完成します”

ご挨拶

津田左右吉博士顕彰会
会長　佐合隆治

二十一世紀を迎えるにあたって、津田左右吉博士顕彰会がかねてからの念願でありました「津田博士の生家移築保存」が、ついに実現することになりました。それこそは、津田左右吉博士顕彰会が発足して以来からの「夢」であり、それがいよいよ実を結ぼうとしているのです。

ここに至るまでには、顕彰会会員はもちろん、様々な方々のご支援やご協力・努力の賜物がありました。しかし、ようやくそれらの全てが一つの明確な形となったわけです。

移設場所は現在、津田博士の胸像が位置する美濃加茂市下米田小学校の隣接地です。このような立地は、今後の生家の活用について様々な方向性を指針しているでしょう。

津田博士の顕彰活動の基点になることはもちろん、地域の皆様方にとっては様々な生涯学習や文化交流の場として、下米田小学校をはじめとした各小・中学校などには伝統的な日本文化を学ぶことができる場として積極的に活用されることを期待してやみません。

そのような新たな状況の中で、我々津田左右吉博士顕彰会が求められる役割は、非常に重要なものとなるはずです。より一層の博士の顕彰活動に邁進していかなければなりません。皆様方の多大なご協力、ご指導をお願いいたします。

最後になりましたが、この津田左右吉博士生家の移築保存に関し、ご協力いただきました方々、美濃加茂市当局の皆様方に深く感謝申し上げます。

～訃報～

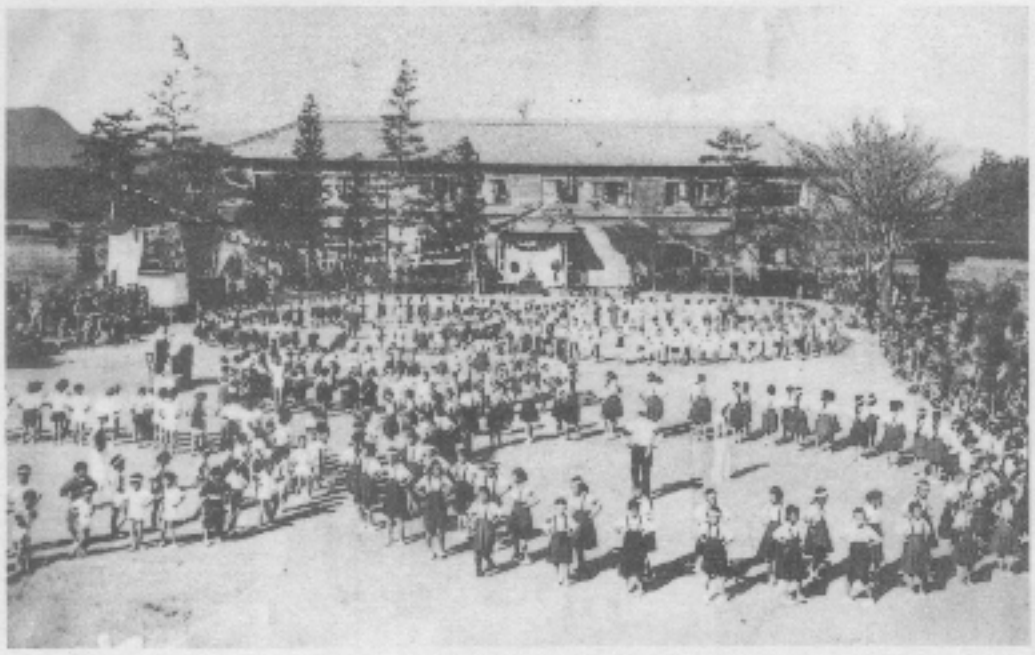
山田　貞實 さん
（やまださだみ）

平成十二年十二月二十五日（享年八十五歳）、ご逝去されました。山田貞實さんは一九一五年に美濃加茂市下米田町にお生まれになり、東京美術学校（現 東京芸大）を卒業後、日本画壇でも有数の画家として活躍されました。津田左右吉博士顕彰会におきましても、様々なご支援をいただきました。心よりご冥福をお祈りいたします。

「津田博士の原体験＝東栃井時代の生活」

津田左右吉博士顕彰会
副会長　大澤　功

現在の東栃井公民館（美濃加茂市下米田町）には、明治十年代の津田家を含む東栃井村全戸の分布図が掲げられ、当時の村内には二十二、三戸の家があったことがわかります。



下米田小学校（昭和３年）

津田博士は明治六年に生まれ、同十二年（七歳）福島村（現加茂郡川辺町）文明小学校へ入学しました。その在学中に、森達先生と出会ったことで博士自身、大きな感化を受けられたようです。そして同十九年（十三歳）には、「飛び級」で一年早く則光小学校を卒業し、それは同学校の卒業生第一号でもありました。同二十二年（十五歳）で大谷派普通学校へ入学しましたが、翌年中途退学されています。しかしこの時、同人雑誌に「漢学の必要性を論ず」と題した論文を執筆されました。その際、山田鍬太郎教頭の奨めで東京専門学校（現在の早稲田大学）の校外生となり、勉強を続けることになります。

―以上が少年時代の概略です。このように見てみますと、恩師森先生との出会い、「飛び級」で一年早く卒業したこと（当時就学してもほとんどの者は中途退学しており、この時も同期生は三名のみだったようです）などが大きな転機だったのでしょう。

津田博士の在郷（東栃井）時代の生活を知るには「子どもの時のおもひで」があります。これは、博士が七十五歳で執筆された著書『思ひ出すまゝ』の巻末に掲載されており、この本は昭和二十四年に下米田小学校へ贈られました。八十ページにも及ぶ博士の少年時代の回想録です。

私はこの本を手にすると、刊行一年前の昭和二十三年二月十日の事をありありと思い起こすことができます。博士はこの時、実に六十三年振りに下米田小学校へ訪れました。そこで私は、村の有志の方や同期生、小・中学校の先生方と共に博士を囲む座談会へ参加したのです。その当時は今だ連合軍の占領下であり、世相を憂う話題が多かった事を覚えています。

その中で、ふいに「先生はここで少年時代にどんな勉強をされたのですか？」という質問が出ました。あまりにも突然のことで博士自身も戸惑われたようです。博士は「七年間ここで学びましたが…」といったきり、考え込まれてしまいました。そして翌年「子どもの時のおもひで」を拝見した時、あの村人へ応えて博士が書かれたものだったのだと思うと、宿直の晩に一気にそれを読みきってしまったものです。

「…『おもひで』を語る前にわたしの生ひ立ちとわたしの家の素性とを、先づいっておこう。自分は昔からのならわしとして初産は生家ですることになつてゐたので…（中略）はるばるそこにいつて生んだのが長男のわたしで…（中略）父は家禄四十二俵の下級武士であったこと、ヨナダというところは、ヒダ川を西の界として東の方は南北に横たはつている低い山つゞきまでの、小さい平地であり、北には、富士山のような形をしたアタゴ山が聳え、南にはマゴシ（馬串）という小さい三角形の岩山がある…（中略）ヒガシトチヰは、このヨナダの北部によった川そひのところにある二十二、三戸ほどの小村であった。…（中略）父はかうして「やまが」の人となり小さい百姓家のあいてゐるのを借りて…（中略）後に新築の自分の家ができていた。」

この思い出の記は津田博士の少年時代の原体験を克明に綴ったものであるとしみじみ感じられます。復元された記念館の中で、皆さんと一緒にもう一度これを読み返してみたいと思いました。

夫人と墓参りする津田博士／下米田にて（昭和 35 年）

第16回津田左右吉賞が決定しました!!

最優秀賞は、中子さん（下呂小）と奥村さん（西可児中）

平成十二年十二月九日、「第十六回 津田左右吉賞（津田左右吉博士顕彰会主催、美濃加茂ライオンズクラブ・可茂茂地区市町村教委後援）」の授賞式及び作文発表会が、みのかも文化の森（美濃加茂市蜂屋町）で行われました。

今回は「あなたの夢」・「津田左右吉博士」をテーマに作文募集を行い、小学校の部に十三校から百八十点、中学校の部に十校から二百七十六点が寄せられました。そのうち二十六人が、大澤功副会長から表彰状などが贈られています。また、中子さんは受賞作「私の夢」、奥村さんが「未来の図書館」を発表し、自分の「夢」を力強く描いてくれました。上田勇夫審査委員長（双葉中校長）からは、「自分の体験を素直に述べ、読み手の心を動かす作品が多い」と全体への講評を頂きました。

その後記念講演会として、絵本作家・東海女子短期大学教授の高畠 純氏による講演が行われました。壇上で即興のイラストを描きながらの楽しいお話でした。

＊津田賞は、津田博士が「子供たちのために」と言って、自分の著書などを下米田小・中学校に贈りつづけていました。これが下米田小学校に残る「津田文庫」です。博士の没後は、津ね夫人が同校へ多額の寄付金を贈られました。その厚志により博士の文鎮を製作し、卒業生に「津田賞」として贈りました。現在は、このような事業を顕彰会が引き継いでいます。

入賞者は次の皆さんです。

小学校五・六年生の部

最優秀賞

中子　かな（下呂小六年）
「私の夢」

優秀賞

角田　竜治（伊深小六年）
「やさしさをあげたい」
森下　大地（栃尾小五年）
「人を守る仕事」

佳作

福田　千裕（伊深小六年）
「夢の実現に向かって」
林　和哉（太田小六年）
「夢を実現するために」
大矢　優花（太田小五年）
「保育士になるために」
加藤亜理沙（太田小五年）
「私の夢」
井上　由貴（大矢田小五年）
「私の夢」
澤野　友香（雌子小六年）
「私の夢」
宮川　朋子（静里小六年）
「私の夢はまん画家」
安富祖　亜紗美（下米田小六年）
「将来の夢」
山野　里紗（中小五年）
「わたしの夢」
朝日　達博（三和小六年）
「ぼくの目指す医師」

中学生の部

最優秀賞

奥村　知世（西可児中三年）
「未来の図書館」

優秀賞

石井　結心（本巣中三年）
「私の夢」
山本亜矢子（東中一年）
「私の夢」

佳作

渡辺　愛文（神渕中一年）
「私の将来」
北川　摩美（北方中一年）
「私は、栄養士になりたーい!!」
田中　宏明（北方中一年）
「めざすはラジオのアナウンサー」
加藤　雅大（桜丘中三年）
「目的のない旅」
桜　静香（西可児中三年）
「仲間が私を支えてくれたから」
小栗　由唯（東中一年）
「私の夢」
木村　睦月（双葉中二年）
「私の夢」
山田　麻由（双葉中二年）
「わたしの夢」
渡辺　大輔（双葉中二年）
「夢の実現を目指して」
國井　千晴（本巣中三年）
「私は翼なしで飛んでいたい」

＊今回応募された子供達の「夢」を応援したいとの思いを抱かれた顕彰会会員の方々に、作文選考に携わっていただきました。ご協力ありがとうございます。次回もこのように応援していただける方がいらしたら、ぜひ事務局までお問い合わせ願いたいと考えています。

いよいよ完成!!
～津田左右吉博士記念館～

下米田町東栃井にあった津田左右吉博士の生家を移築させ、復元する計画が美濃加茂市によって進められてきましたが、この度ようやく完成の運びとなりました。

明治時代にお生まれになった津田左右吉博士の生家を保存する計画が発足し、一昨年には建物を解体して保管していました。その解体作業に伴って、全体の構造や家の建築された年代、その後の修理時期など多くの知見を得ることができました。そうした成果を元に、建物を美濃加茂市下米田町西脇（下米田小学校東隣）へ移築して復元する作業が続けられてきました。その作業もいよいよ終了の兆しが見え、4月以降には開館することとなります。

記念館には、以下に述べるような多くの期待がよせられています。

（学習・文化交流の場として）

・稀有の大学者の遺徳、学問の業績を後世に伝え、次世代の青少年の目で見ることのできる学習の場となる。

・児童、生徒が伝統的な日本文化を学ぶことができる施設となる。

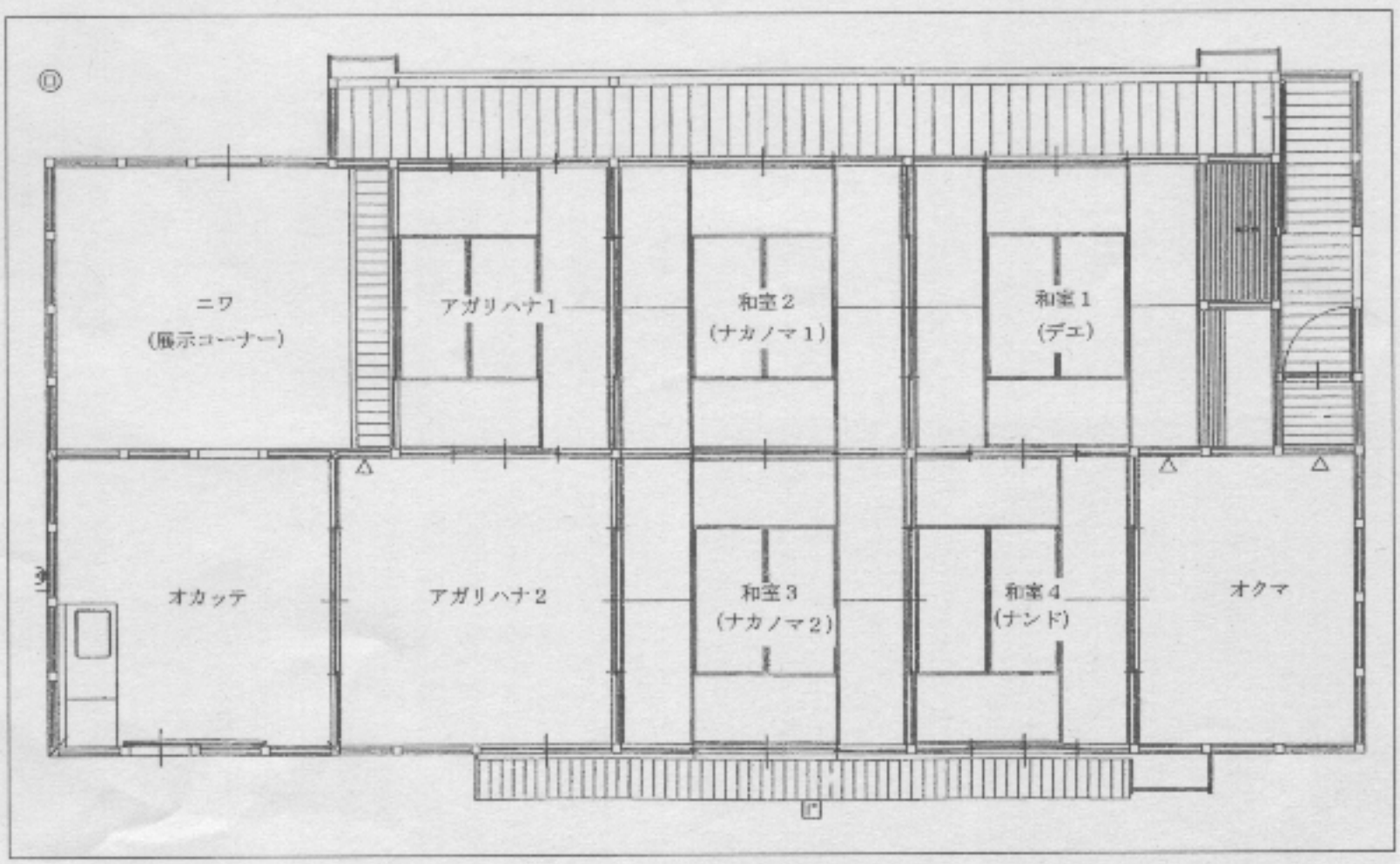
（文化財として）

・明治初期から残る民家として、民俗資料としても貴重な文化遺産を保存する。

などです。

館内は津田博士の遺品や解説パネルが設置され、博士の生涯を一望できるような展示になります。その上で、氏の業績をわかりやすく普及できるような顕彰活動を行います。また、各種講座やサークル活動などを館内で行うことも可能です。学校などは、歴史学習、写生大会や俳句会などの学習会や様々な発表会の場として利用することができるでしょう。

今後とも、顕彰会が館の運営を積極的に推進させる原動力となる必要があります。



これが館内になります